たちばな新聞

発行所　宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101
電話　042-558-2663

秋の行事

龍ノ口法難会　九月十二日(日)
秋彼岸　九月二十日(入り)～二十六日(明け)
お会式　十月十二日(火)

本年のお会式はコロナの収束が見通せないこともあり、参列者なしで住職が供養させていただきます。檀信徒の皆様は、たちばな新聞に同封のはがきを使用し、お彼岸・お会式にお塔婆をお供えし、密を避けて墓参されるようお願い致します。

秋には龍ノ口法難会・秋彼岸・お会式と日蓮宗で大切な法要があります。龍ノ口法難は、『立正安国論』を著して鎌倉幕府に呈上した日蓮聖人を捕らえて、龍ノ口刑場で斬首しようとした事件で、日蓮聖人四大法難の一つです。文永八年九月十二日、平頼綱により幕府や諸宗を批判したとして佐渡流罪の名目で鎌倉の松葉谷草庵にいた日蓮聖人を捕縛連行し、翌日の子丑の刻(午前二時前後)、日蓮聖人を土牢から引き出し斬首しようとしたが、(伝承によると)江ノ島方より光の玉がやってきて光の衝撃で刀は折れ、首を刎ねることができなかったという。刑場跡地には、現在、寂光山龍口寺が存在している。当山では、以前、龍ノ口法難会に、刑を免れた日蓮聖人に信徒がぼた餅を差し上げたとの言い伝えにより、ぼた餅をお供えし檀信徒の皆様と法要を行っていました。

最近では、檀信徒の皆様の参列を得ての法要は「七月・八月のお施餓鬼法要」「お会式法要」を厳修しております。その法要もコロナの収束が見通せない状況から、本年も昨年に続いて、参列者なしで住職のみが法要を行うことと致しましたので、ご理解いただきますようお願い致します。

お会式は日蓮聖人の命日十月十三日、前日の十二日（お逮夜）に、日蓮宗の各寺院で法要を厳修し、各地から集まった講中が行列し万灯や提灯を掲げ、纏を振り、団扇太鼓や鉦を叩き、お題目を唱えながら境内や寺の近辺を練り歩く、特に大田区の池上本門寺が有名です。お会式の起源は定かではないが、歌川広重の作品『江戸名勝図会』に描かれていることから、江戸時代末期には始まっていたと考えられている。当山でもかつては、本門寺と同様に、講中が万灯を納め、境内には屋台の店が出るなど盛大に行われていました。近年は、法要を中心に行ってきましたが、この二年間コロナの関係で、参列者なしで行うことになりました。

来年は、お施餓鬼・棚経・お会式などの行事は参列者と一緒に実施したいと思っています。

宝清寺の年中行事

二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリング
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お会式法要
十二月初旬	お釜締札

住職ひと口法話　第六十六回

現代は地球の裏側の出来事もマスコミを通じてすぐ知ることができ、数多くの情報が駆け巡る時代です。さらに、マスコミはただ事実を伝えるだけでなく、様々な切り口から問題提起をする役割も担っています。政治の汚職・環境問題・薬害訴訟など、マスコミの取材をきっかけに世間の注目が集まり、問題が解決されたことも少なくありません。しかし、時に一部の報道ではただ視聴者の怒りや不安を煽ることで、テレビの視聴率や雑誌の売り上げが目的では、と感じられるのも事実です。

現代は情報過多で、以前から、マスコミの功罪が議論されているところでもあります。そうした状況下で、我々は満足感が得られないばかりか、欲求不満すら感じる社会に生きています。そのようなことを考えていた矢先に、インドの弁護士・宗教家・政治指導者であったマハトマ・ガンジーの次の名言に出会いました。

『七つの社会的犯罪の教え』

① 哲学なき政治　② 労働なき富
③ 良心なき快楽　④ 品格なき学識
⑤ 倫理なき商売　⑥ 人間性なき科学
⑦ 献身なき信仰

です。

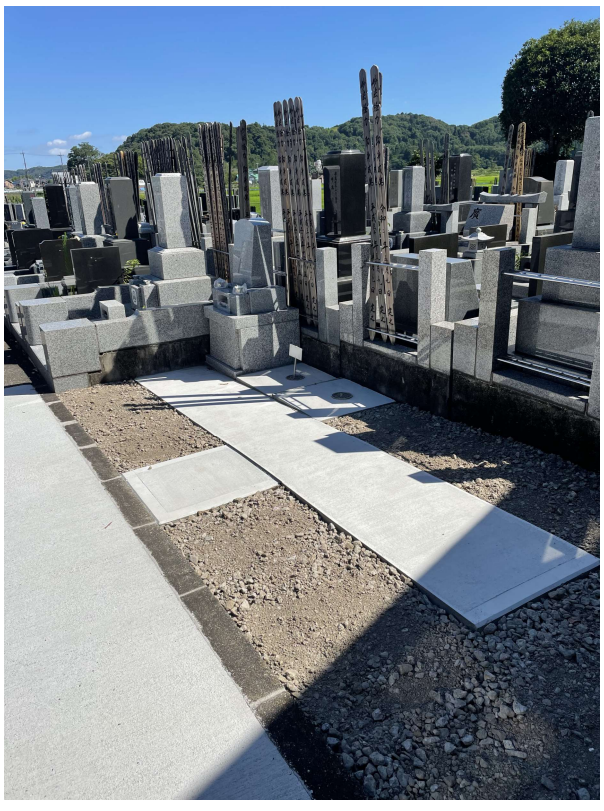
ガンジーは南アフリカで弁護士をする傍ら、公民権運動に参加し、帰国後はインドのイギリスからの独立運動を指揮した。民衆暴動やゲリラ戦ではなく「非暴力・不服従」を提唱しました。ガンジーの「七つの社会的犯罪の教え」には、政治や科学には、哲学や人間性が大切であり、商売・宗教などには、倫理や献身が大切だと述べています。

激変の時代にあって、過多な情報に振り回されないために頼りになるのは、自身の哲学(意識)を持ち、「身と心」の安定を保つことです。そして、自身の意志を明確に持ち生きるよう心がけることだと思います。

最後に、フランスの哲学者・モラリストのアラン(ペンネーム)は「楽観は意志　悲観は感情」と述べています。自身の哲学・意志を明確に持つことは、苦境を乗り越える一つの方法かも知れません。

スマート墓石　新規販売十二区画

格安のスマート墓石第一期、第二期販売が完売致しました。その後も問い合わせがあり、この度、スマート墓石第三期十二区画を販売することと致しました。



新規販売１２区画

見本墓石

第三期販売墓石は、右写真のとおり、第一期、第二期の墓石とデザインを異にし、和洋の両方を生かしたデザインになっています。

墓所永代使用料・墓石・工事代金・彫刻料を含み、〇・四二㎡、七二〇、〇〇〇円(税込)で販売致します。
納骨は四霊まで可能です。墓苑管理料は年間一二、〇〇〇円です。

「天空友情の郷」販売中

たちばな新聞一一五号、令和三年三月春彼岸号でご案内の**ペットと眠れる樹木葬墓地「天空友情の郷」**を販売しましたところ、関心が高く、多数の方にご契約いただいております。

管理料は不要で、境内の施設は全て使用可能です。
墓地をお探しの方に、是非ご見学をお勧め下さい。

法華経と私たち　第十一回

授学・無学人記品第九

諸仏を供養し、ガンジス川の砂の数に等しい幾千万億の菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提を得るだろう。国は常立勝旛といい、時代は妙音偏満という。仏の寿命は無量の阿僧祇劫で計り知ることはできない。正法の続くこと、仏寿に倍し、山海慧自在通王仏は十方の諸仏に賞賛されるであろう。」そのとき、会衆のなかの発願したばかりの菩薩たちは、諸々の大菩薩たちが記を受けたと聞いたこともない、まして声聞が何の因縁があって授けられるのかと思った。釈尊は菩薩たちの思いを察して告げた。「皆のものよ、わたしと阿難はかって空王仏のところで、同じく発願した仲である。阿難は常に多く聞くことを願い、わたしは悟りに達しようと精進することを願った。それゆえわたしは、すでに阿耨多羅三藐三菩提を得たが、阿難は法を守り将来に伝えて、多くの菩薩を教化しようとしてきたのである。それゆえ、記を授けたのである。」阿難は、授記され、自分の国土の荘厳なるを聞き、過去の本願をも知って大いに感激した。

そのとき、釈尊は羅護羅に「お前は来世に仏になり、蹈七宝華如来と号するであろう。多くの諸仏を供養し、今わたしの長子であるように、それらの諸仏の長子となるであろう。山海慧自在通王如来の場合と同じであり、やがて、阿耨多羅三藐三菩提を得るだろう。」

そのとき釈尊は、学・無学の二千人を見た。みな心は穏やかで、一心に釈尊を仰いだ。釈尊は阿難に「この学・無学の二千人たちも多くの諸仏を供養し、十方の国々において、同時に、それぞれ仏になるだろう。みな宝相如来と号するであろう。仏の寿命は一劫で、国土が荘厳なこと、声聞や菩薩たちの様子、正法と像法の永さ等は、ことごとく同じであろう。」と告げた。

そのとき、阿難と羅護羅はこう思った。「われらも記を受けられたらどんなにうれしいだろう」と。二人は座を立って釈尊の前にいたり、頭面に足を礼して、ともに言った。「世尊よ、われらにも恩恵を賜る資格があろうかと思います。阿難はずっと世尊の侍者でしたし、羅護羅はまさしく世尊の子でございます。阿耨多羅三藐三菩提の記を授けられれば、大変うれしく思います。」そのとき、学・無学の声聞たち二千人がいっせいに座を立って、右の肩をあらわにし、釈尊の前にいたり、一心に合掌して、釈尊を仰ぎ見た。釈尊は阿難に言った。「お前は来世において、仏になるだろう。山海慧自在通王如来と号するであろう。六億二千万の

岩崎喜久子様より額・茶壺・屏風三点奉納

岩崎喜久子様より、ご主人故岩崎孟司様の菩提のためにと、螺鈿扁額・茶壺・風炉先屏風の三点を奉納されましたのでご紹介し、お礼に代えさせて頂きます。

『螺鈿扁額』

扁額には、「和、及び、気は永く　心は圓く　腹立てず　口慎むが　長生きのもと」と書かれています。「和」の旧字体は「龢」で、偏の「龠」は「人が吐く息」を意味し、旁の「禾」は「木の管」を意味します。

従って、**「和」は「仲良くすること」を意味しますが、本来、木の管に息を吹き込むと共鳴し美しい音を出すことから、異質なもの同士がそれぞれの個性を発揮して響き合うと言う深い意味があります。**

「気は永く・・・」は建長寺住職が揮毫したもので、これは達磨大師の言葉です。

現代社会は、自己主張をしたり、意地を張ったりして、心が尖っている人が多く、殺伐としたものを感じます。広い心でいたい、短気は損気と分かっていても、感謝の気持ちも足らずという現代人には、手厳しい言葉である。この言葉から、人生とは自分の心を磨いていくものだと思い、自分の内側にある心を磨き続け、自分の心から光が放たれるようにしたいものです。

『茶　壺』　斎藤雲楽作

この茶壺は清水焼で、伝統工芸士・斎藤雲楽作色絵藤花図茶壺と題する作品で、茶道を嗜む岩崎喜久子様が大切にされていたもので、応接間に飾らせて頂きました。

酒井抱一筆『槇秋草図屏風』

酒井抱一（一七六一～一八二八）は姫路城主酒井雅楽頭忠以（宗雅）の弟であり、尾形光琳派の画風を集大成し、江戸の地にその派を広め、琳派の業績をたたえてその普及につとめたことで知られている。

この屏風絵について、美術史家の中村渓男氏は「抱一自身余程気持ちのよい時に描いたものか、のびのびとした筆さばきを見せ、これ程見る側に爽快な気分を味あわせる作品は少ない。特に屏風全体の寸法が小さいし、高さも低く横長な画面であるが、ここに描かれた風情は、深まり行く秋の気配をひしひしと感じさせると共に、金地バックのため豪華さもある。大作ではないが、画面展開は何ら大作とは変わらず、むしろよく引き締まった中に珠玉のような美しさと輝きさえ感じる。これは寸法から茶事に用いる風炉先屏風で、現在も、抱一の居室図が残る雨華庵内の一部に、自前用として描いたものではないかと思える。図は秋の草花が多く、黄菊・白菊・女郎花・桔梗・刈萱・藤袴・萩・槇である。槇は屏風全体を引き締めるものであろうが、これが色彩配合上でも重要な役割を果たし、抱一の非凡な才能をあらわしている。

この屏風絵は、色彩展開の点から見て、大体左半面は、左方菊の黄色を、中央やや左寄りには槇の黒と代赭色の幹を配し、右半面との境には明るい紫の桔梗を咲きほこらせ、緑の刈萱が延びて上部の槇と連絡している。白菊と桔梗を隣り合わせ、その葉を緑にせず墨であらわしたところなど、紫の花との対照が鮮やかに工夫されている。しかも、菊の葉の墨を強調して画面の手前に浮かび上がらせ、白菊は右方の中央に置き、さらに薄紫の藤袴の細い花と萩の可憐な薄紅色の花がちりばめられていて実にみごとな色彩感覚である。金バックという華やかさの中に、少しも騒がしくない落ち着いた秋の感じを思わせるものがある。

光琳の画業に私淑した抱一が、多くの制作をしたうちでも、この屏風絵は快心の作であると断じても過言ではない。洗練された画技と澄んだ画境が余すところなく展開されており、小画面ながら整然とした骨組みを構成している。然し抱一が夏秋草図屏風（国宝・東京博物館蔵）に示したものより格式ばった堅さがなく、気楽な気分で筆をとっていることは明らかである。色彩画でも、ただきらびやかさを押さえて統一のある色の流れでまとめた、傑出した作品といえる。左側に書かれた落款は『抱一筆』とあり、その下に朱文扇型に『雨華庵』と読まれる印章が押されている。『雨華庵』は抱一の邸の庵号であり、この屏風絵の制作年代を決める証拠になる。」と絶賛している。

このような貴重な螺鈿扁額・茶壺・風炉先屏風を奉納いただき、寺宝として大切に保存させていただきます。